

やりたいこと



若 者

清 川 謙 介*

What I want to do

Key Words : research, chemistry, interest

1. はじめに

現在、私は、有機化学を専門分野として研究をおこなっている。2012年4月に大阪大学大学院工学研究科応用化学専攻で助教として着任して以来、はやくも5年が過ぎようとしている。さらにさかのぼると、大阪大学に入学して、大学2年次に化学を専門とするコースを選択し、4年次の研究室配属では有機化学分野の研究室を選び、博士後期課程まで修了した。今考えても、大学入学時から想像もできないような人生である。今回、この「若者」を執筆させて頂く機会を与えていただいた際に、内容は自由であるということだったので、筆者が学生の時に何をどう考えて現在に至ったのかをふりかえりつつ、研究者となった今、どう考えているのか、“書きたいこと”を書かせていただく事にする。

2. 学部生時代

学部生の時は、普通に大学の講義に出席し、アルバイトをし、友人と遊ぶという、いわゆる平凡な“学生生活”を送っていた。特にやりたいことを懸命にやっているわけでもなく、毎日を淡々と過ごしていた。しかし、大学3年次の、ふとした時に「大学生時代に何か成し遂げたか？将来、やりたいことは何か？」という質問に、瞬時に答えられないと気づき、大きな不安を覚えたことを記憶している。(当時は、

研究室配属後にひらかれる本当の研究生生活というものをはほとんど認識できていなかった。)そこで、色々とやりたいことを模索した末、3年次を終了した時点で休学し、アメリカのカリフォルニアへ1年間留学することを決意した。休学かつ留学という突然の提案を受け入れてくれた両親、さらに「是非とも行って来い」と背中を押していただいた担任の桑畑進先生には深く感謝している。留学といっても専門の化学を勉強するためではなく、単なる語学留学であり、現実逃避的な決断であったと指摘されても反論はできない。しかし、結果的にこの留学中に様々な刺激を受け、留学していなければ今の自分はなかったと断言できる。現地では、様々なバックグラウンドを持つ人々が留学してきており、その多くが将来やりたいことをはっきりと持っていた。私のような“気分転換”的な人は、恥ずかしながら少数派であった。やりたいことを持つ人たちは、例えば現地の大学に編入するなど、その行動力には目をみはるものがあった。私もアメリカの大学に入学し直そうかと、ほんの一瞬考えたこともあるが、実際それほどの勇氣もなく、結局、帰国して“化学をやろう”と決意するに至った。アメリカで知り合った友人たちとは今でも交流があるが、しばしば「ノーベル賞いつとるん？」と気楽に聞かれ、「いやいや、無理無理。」と返答している。もちろん、本当に期待されているとは思っていないが、ささやかな応援として受け取っている。

3. 研究室時代

研究室配属では、希望通り、有機合成を専門とする馬場章夫先生の主宰する研究室に配属されることとなった。1年ぶりに化学に触れることとなり、基本的な化学用語すら忘れていたような状態だった。しかも、いきなり研究室での実践的なレベルである



* Kensuke KIYOKAWA

1983年10月生
大阪大学 大学院工学研究科 応用化学
専攻 (2012年)
現在、大阪大学 大学院工学研究科
助教 博士(工学) 有機化学
TEL : 06-6879-7401
FAX : 06-6879-7402
E-mail : kiyokawa@chem.eng.osaka-u.ac.jp

がゆえ、当初は勉強、実験ともに相当苦労したのを覚えている。研究室の方々からすれば、1年間所在も明らかでなかった変なやつが入ってきた、と思われていただろう。しかし、研究室での化学の研究は大変おもしろく、化学の教科書や関連論文を読んで勉強することも大して苦痛には感じなかった。大学入学以来、ようやく本当にやりたいことを見つけたように感じた。結局、博士後期課程へ進学し、無事(!?), 学位を取得することができた。博士後期課程の間には、ドイツの Rik R. Tykwinski 教授 (University of Erlangen-Nürnberg) のグループへ3ヶ月間留学する機会をいただき (今回は研究留学!), 海外での研究室生活を経験することができた。もちろん、おいしいドイツビールも存分に堪能することができた。

4. 大学の研究者として

博士後期課程修了後、幸運にも、同じ専攻内にある、南方聖司先生の主宰する研究室で助教として採用していただくことになり、現在に至っている。正直なところ、学生の時には、あまり後先考えず (本来ならば色々先のことと考えて研究を進めるべきだが)、目の前の研究に没頭すれば良かった。しかし、大学の教員 (研究者) になったということは、この先、長きに渡り研究を続けていくということであり、より視野を広く持ち、先を見据えて研究に取り組まなければならない。さらに、学生を指導しつつ、学内業務をこなし、一定の研究成果をあげることが必要となり、なかなか一筋縄ではいかない。もちろん、研究をやりたいという気持ちに変わりはなく、現在進行中の研究もやりたいようにやらせてもらっているのだが、さらに踏み込んで、それではその先に何をやりたいのか、何を目標しているのか、という問はけっこうな難題である。

かの有名なスティーブ・ジョブズ氏が2005年にスタンフォード大学の卒業式に招かれた際の講演で “If today were the last day of my life, would I want to do what I am about to do today?” と述べている。日本語に訳すと、“もし今日が人生最後の日としたら、今やろうとしていることは本当に自分のやりたいことだろうか?” となる。続けて、“No という答えが何日も続くのであれば、あなたは何かを変えなければいけない” と。さすがに毎日が人生最後

の日だと考えるのは、いささか極端すぎると思うが、やりたいことを探し続けていくためには重要な指摘であると思うし、これからの参考にしたいと思う。

少し話は逸れるが、筆者自身、少し前に網膜剥離を患った。ちょうど、ハワイで開催された学会、Pacifichem 2015に参加している最中であった。あの、視界がどんどん欠けていく体験は、なかなかの恐怖であった。幸いにも大事に至る前に帰国することができ、手術の末、失明という最悪の事態は免れた。今となっては大げさではあったと思うが、当時は、これまでのように仕事に復帰できるのか、研究は続けていけるのだろうかと不安になった。周囲の寛大さも助けとなり、その後順調に回復しており、未だやや不便は残るものの、以前と同様の生活を送れている。

それ以降、より一層、限られた人生の中でやりたいことはなんだろうか? と考える機会が多くなった。この先、本当にやりたいこととは何だろうか。おもしろい研究をすることか、社会の役に立つ研究をすることか、はたまた専門分野で有名になることだろうか。日々、色々自問自答しながらも、未だ明確な答えは見い出せていないように思う。実は、やりたいこと (研究テーマ) を探求し続けることこそ、本当にやりたいことのようにも感じ、大学の研究者だからこそ、それができるのではないかとも思う。タイムリーなことに、本稿を執筆している今週はノーベル賞ウィークである。ノーベル賞を受賞された大隅良典先生も、「誰もやっていない研究をやった。何かの役に立つと確信していたわけではない。何に興味があるのかをよく考えて。」と、話されていた。また、色々考えさせられた。

5. おわりに

“やりたいこと” がはっきりとしないまま、この執筆を終えることになってしまい大変恐縮ではあるが、結局は自分の興味、好奇心に勝るモチベーションは無く、自分がおもしろいと思うことをやり、探し続けていくことが“やりたいこと”であるように思う。まずは、目の前のやりたい研究に全力で取り組み、この先、共同研究者および学生と、私の“興味”を共有し、少しでも長く研究者人生を送れることを望むばかりである。

6. 謝辞

本稿執筆の機会を与えていただきました大阪大学
大学院工学研究科教授の安田誠先生、ならびに「生

産と技術」の関係者の方々に感謝申し上げます。ま
た、研究者の道へと導いて下さった、馬場章夫先生、
ならびに南方聖司先生に深く感謝申し上げます。

